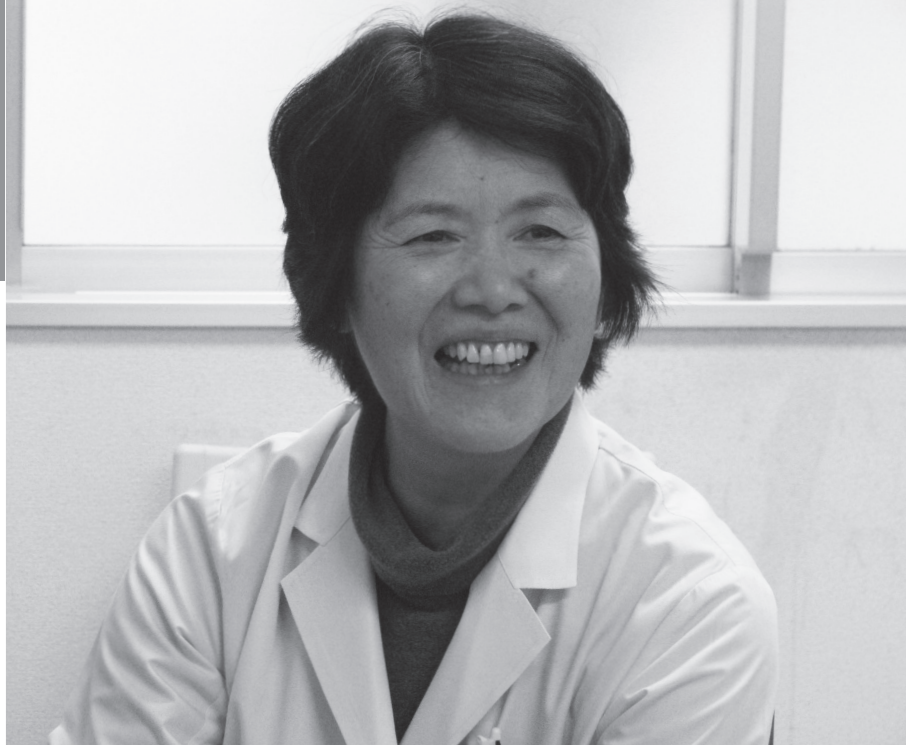


INTERVIEW

認定NPO法人ザンビアの辺地医療を支援する会
副理事長 山元香代子先生



辺地の人々に 基本的な医療サービスを

聞き手：山田隆司 地域医療研究所所長

へき地で学んだ多くのこと

山田隆司(聞き手) 今日は鹿児島県昭南病院に山元香代子先生をお訪ねしました。山元先生と私は同じ自治医科大学3期生で、苗字のあいうえお順も近いことから学生時代から身近な存在でしたが、卒業してからはお会いする機会があまりなく、十数年前に中国でお会いしたのが直近でしたね。

まずは、先生が卒業されてから現在の国際医療協力の仕事をされるまでの経歴をお話いただけますか？

山元香代子 私は宮崎県出身で卒業して県立宮崎病院で2年間の初期研修後、3、4年目に宮崎県の椎葉村、日本の三大秘境の一つといわれて

いるところに赴任しました。宮崎県は内科・外科のペアで赴任することになっていましたので、1期生の神尊敏彦先生と一緒にでした。

山田 そこは病床もあったのですか。

山元 20床ぐらいありました。救急患者さんを延岡まで送ることも多く、帰ってくるともう夜の9時、10時なのですが、患者さんがみんな座って待っているのです。今日の回診がまだ終わっていないということで、それからやっていたですね。

山田 椎葉村は、住民は何人ぐらいいたのですか。

山元 そのころは5千人ぐらいいました。今は2千人ぐらいしかいませんが。

山田 それを2人で、救急搬送まで対応していたの

は大変でしたね。

山元 神尊先生がいろいろな手術をされたのでその手伝いもしたのですが、血圧がストーンと下がったりするともう足がガクガク震えて……。そうすると「こら、しっかりせんか」とか言われました(笑)。椎葉では本当にいろいろなことを勉強させていただきました。

患者さんからも教わることも多くありました。例えば、点滴をして終わったから「抜きますよ」と言うとき、患者さんに「抜かないでくれ」と言われます。「どうして?」と言うと「管の中にまだ残っている」と。「自分は入院している間、一銭も収入がないのだから無駄遣いしないでくれ」と。レントゲン1枚撮るにしても、お金がないから今日は勘弁してください、薬も抗生物質は高いから安い薬にしてくれなどと言われました。都会では当たり前医療が受けられるけれど、そうでない現実があることを知りました。それでも本当に皆さん一生懸命生きていらっ

しゃる、頑張って自宅で病気の両親の面倒をみたり、あるいは病気の奥さんを抱えながら生活している人たちなどをたくさん見ました。そうして真面目に懸命に生きていらっしゃる人たちの応援ができるような、そういう医者になりたいと思ったのが私の原点ですね。

山田 そういうことは田舎に行かないと分らなかったと私も思います。往診に行くと、何年も寝たきりの患者さんが床ずれがひどい状態になっていたり、あるいは近所の人も存在を知らないような娘さんが家に閉じこもっていたり。往診に呼ばれて初めて知るということもありましたが、普通は病院に来る人しか診ないわけですが、地域では全部見えてしまうというのがありますね。亡くなれば診断書がないと葬れないわけだし。

山元 当時椎葉は自殺がすごく多いところだったので、自殺の検視に行くのはつらかったですね。

公衆衛生という立場で

山田 椎葉村のあとはどこへ行かれたのですか。

山元 椎葉のあとは、研修で自治医大の小児科に10ヵ月戻りました。その後県立日南病院に小児科医として赴任しました。ここは小児科医が2人いたのですが、365日24時間当直をしている感じでとても大変でした。その後、へき地の東郷病院へ行き、また日南病院へ戻り、次に西米良病院へ行って、最後にまた椎葉病院に10ヵ月行きました。義務の最後は椎葉村でした。

山田 義務年限を修了した後はどうしたのですか？

山元 自治医大に戻って、眞弓 忠先生の研究室で博士号を取りました。3年と少しでしたが、臨床に戻りたいと思ったので静岡県焼津の市中病院

で1年ぐらい仕事して、その後に新潟のゆきぐに大和病院へ行っている時にWHO(世界保健機関)の話があったのです。「小児保健の仕事があるので行ってみませんか」ということでしたが、公衆衛生のバックグラウンドは全然なかったのですね。すでにWHOにいらした尾身 茂先生にも「本当に臨床を辞める覚悟はあるのか?」と聞かれましたが、「本当に辞めます」と言ってWHOのマニラに行きました。

そのころ、IMCI(Integrated Management of Childhood Illness)とあって、総合的に子どもを診なければいけないという考え方が出てきたのですね。つまり途上国で、多くの乳幼児が死亡し